

明恵上人語録
高山寺藏

「却廢忘記」鎌倉時代写本の用語

——日本語の歴史・中世（昭和四十四年十二月号）の補訂・正誤に寄せて——

小林芳規

（前言） 本誌昭和四十四年十二月号「日本語の歴史・中世」の小稿は、著者校正の機に恵まれぬままに、多くの誤植等を残して公刊された。今般、編集部から、正誤と補訂の機を与えられたので、その後、高山寺経藏で調査することが出来た、明恵上人語録の「却廢忘記」二帖の用語についての報告をも添えることにした。この用語には鎌倉時代語として貴重な内容を含み、先の小稿を補強するものが多い。この貴重書の調査の機を与えられた高山寺及び関係の方々には御礼申上げる。

「却廢忘記」の用語について

「却廢忘記」二帖は、明恵上人（貞永元年（二三）六十歳入滅）の日常の教訓や談話の聞書の類であつて、その弟子の長円が、上人入滅後三年を経た文暦二年（二三）に、その言葉の廢忘を恐れて思出すま

まに忠実に、書留めたものである。梅尾高山寺経藏に、その自筆原本が残っている。これは、全帖片仮名交り文で書かれているので、上人の談話語を知ると共に、鎌倉初期の口頭語の実態の一端を知る上に貴重な資料である。

「却廢忘記」（重要文化財第一部二八〇号）は、有合せの楮紙を大福帳型に袋綴に仕立て、仮綴とした体裁の二帖を利用して、書留めたものである。巻上（ 14×23 、表紙共二十三紙）、巻下（ 14×25 、表紙共二十八紙、但しこの帖は墨付六紙だけで他は白紙）両帖共に、表紙中央に「木中」、右上に「東第三箱」と別筆で記され、外題は本文と同筆で「却廢忘記上禪院」「却廢忘記下」とそれぞれある。両帖共第一紙表に「方便智院」の朱古印を捺印してある。巻上の巻頭には、「禪堂院世出世御物語聞書」とあり、続いて、「文暦二年九月六日始之」、随思出記之、次第不同、或乱句、年月日次等」不分明之間、

只記其御」詞文、不雜私詞者也、「恐経年序廢忘故」為自分記之
御詞上テ書之とある字句によつて、書写（成立と同時）時期とその
私詞サケテ書之成立事情が知られる。即ち、上人の御言葉が年を経て廢忘すること
を恐れて、思出すままに不同に年月日次も不分明のまま、文曆二年
の九月六日書き始めたもので、長円の私詞は雜えず、御詞文を忠実に
書留め、表記上、御言葉は行頭から記し、長円の言葉は行頭より
二三字下げて明確に區別したという。事実、次下の举例からも窺わ
れるように、その區別は嚴格であり、その忠実な態度が知られる。
片仮名字体や漢字の字体は、鎌倉期文曆頃の様相を呈している。寂
恵房長円は、同弟の順性房高信（漢文明恵上人行状、高山寺縁起、
明恵上人遺訓、明恵上人歌集の編者）ら、明恵の言葉を後世に伝え
るのに努力した人々の、一人に入る。

「却廢忘記」の談話の内容は、冒頭の「当山止住ノ始ツカタノ御教
訓ニ云」を始め、法話の折の述懐、日常の文言、幼時の思い出、和
歌作法の心構え・學問についての考え・自然観など様々であり、長
円の私詞（説明）にも「是仰タハフレ也」（巻下二オ）、「或時御利口
ニ云」（巻下三オ）、「是常仰也」（巻上、三オ）、「私云是物ノタトヒ
ニ被仰之」（巻上、二、二十二ウ）など多様であることが知られる。和歌
についての御言葉を例示する。

例文(一) 巻上十二丁オ—十二丁ウ

專念房ノ和哥回「マル、事順行房ノ」被申次ニ仰云

和哥ハヨクヨマムナント「スルカラハ無下ニマサナ」キ也只
何トナク読チ「ラシテ心ノ実ニス」キタルハクルシクモ「ナ
キ也

例文(二) 巻下二丁オ

或時秋禪堂院ノ御房ニ「禪上房ニ被仰云

此前ノ柿ノ木ノ葉ノチ」リテ庭ニ候カ風ニフカレテ「アナタコ

ナタヘマカリ候カ」鳥ノシアルクニニテ候ヲ」カキトリト申
サムト思候也」コレテイノ事ハカク申ソ」メツレハヤカテ和
哥ノコトハナトニモナルコソ候メレ」

是御タワフレ也

例文(三) 巻下一丁ウ

又出京ノ時西京ニテ女ノ「アマタツレタルカイヒシ事」耳ニ
トマリタル事アリキ」一人ノ女、人ノワロキ事ヲ「イヒテニ
クムニイマヒトリ」ノ女ノ云ク人ノワロキト「イフハタ、ワ
カミノワロキト」オモ。ヘキ也云々 コレヲ「サイ」カクニ
テアルナリ

例文(三)には、道ずりの女の会話も含まれる。これらは内容そのもの
にも興味の深いものが多いが、ここでは、中世語という観点から、
その用語について、注意すべきものを取上げ、先の小稿を補うこと
にする（以下の例文には行末を示す符号を付けない）。

尚、本資料は、早く「大日本史料五編之七」（昭和五年）、「明恵上
人要集」（奥田正造氏、昭和六年—八年）に収められたが、国語史料
としては殆ど顧みられずに来たものである。

(一) 連体形が、終止形の終止機能をも兼用する例

1 胎藏界伝受時仰云

(如)

此ハ両部ノ大日女来ニウケマイラスルト思ハセ給ヘキ也
(巻上二十二丁オ)

2 又見性房ノ仰ラレシ事ノ耳ニトマリシ事ノ侍「ハルノスエ
夏ノハシメニハシキミノ花ノミル」トシテ心ヨケナルカ仏
ニマイラセテムストオホヘテウレシキ」トオホセラレシテア
ハレニ心ニトマリテオホユルト云

(巻下一丁ウ)（会話の「」は私に加う）

(2)の例は、「オホユル」までが明恵の言葉である。「ト云」は聞書

筆者長円の説明になる。従つて口頭語が書留められたと見られ、そこに連体形が、特定のテニヲハの呼称もなく、終止用法に用いられた例を如実にのぞかせている。(1)の「マイラスル」も同趣の例である。先の小稿の挙例が「ケリ」「タリ」「スル」など助動詞や形式語であつたのに対して、「オホユル」のような動詞の例が加わることになる。

「コソ」「ソ」の係助詞に応ずる結びは一応正しいが、「夕方コソ」出道場スルホドニ、只二時ニテ三時ハカナハサリキ(巻上二十一丁ウ)のように、「ホドニ」の条件句に存する例がある。

(二) 助動詞の附属用法の乱れ

断定の助動詞「ナリ」が、終止形に付いた例も見られる。

律ニモ身語アラハシテシラシムヘキ事ヲハカク分明ニ申事ニテアリ也(巻上十五丁ウ)

これは、終止形を連体形の用法に用いた例とした「侍リメリ」「ムマルニハアラズ」と同類となるう。

又、推量の「ベシ」に、推量の「らむ」の付いた例も見られる。

法師ノワルサコハイカ、スヘカルラム(巻下三丁オ)

あれこれ考えてどうしてもこうあるだろうの意の「ベシ」に、本来現在推量乃至疑惑の「らむ」が付くのは、意味上からも不審であるが、これは当時に「らむ」の意味用法が変化し、推量の「む」と同義となつて「イカ、……ヘカラム」程度の意を示すものとなつていたことの反映であるう。

(三) 完了助動詞「ヌ」のナ変動詞への附属

人ノ頭キラレハソレニカハリテ頭ヲモキラレテシニナムトセント思キテ候ヘハ(巻上十八丁オ)

先に「シニ、ケリ」を宝物集・三宝絵(文永十年写本)から挙げたが、これは、確例として早い例となる。

四 口語的語詞

(1) 助詞「バシ」

「却廢忘記」には、「バシ」の使用が屢々見られるのが印象的である。「バシ」はこの期に現れた助詞とされるが、この資料の例は、その最も早い確例に属する。しかも、その用法を見るに、特に次の二点において、従來說かれて来た所と異なる用法を示しており、注意される。第一には、「バシ」は、推量・疑問・禁止又は仮定条件を表す句中に使われるとされて来た(室町時代の言語研究)が、本資料では、推量七例(中、一例は打消推量)、禁止三例、仮定条件二例の外に、否定の句中にある例が一例と、又、別に特定の制約のない句中の用法とが見られるのである。

【推量の句】 1 又真言ニ心サシコトニアラハ大日経ノ疏ハシモヨマセンスル也(巻上二丁オ)

2 タ、アカハシヲトサム料ニ聊行水分トオホシクテ(巻上十一丁オ)

3 又ミ、スナトニ光明真言ハシヨクミテカケサセ給ハ人ソ高
一カ弟子ニテハオハシマサムスル(巻上十六丁ウ)

4 我ハ随求タラニハシ一向ニヨミテアラムト思ハン人ハ(巻上十九丁オ)

5 カマヘテアサイハシセテ精進ノ行ハケマセ給ヘシ(巻下五丁ウ)

6 今ハ無下ニ死ニ期チカツキタレハカマヘテ敦返ハシヲモカサ
ネ他事ナク行ヒテ候ハムト思也(巻下一丁ウ)

【打消推量(意志)】

7 語房ノ信随ウケテカマヘテアサイハシセシトハケミアハ
ルヘキ也(巻上十丁ウ)

【禁止の句】 8 如此ノ法門ノコトハリ聞テ別ノ事ハシオモハセ

給フナ(巻上十五丁オ)

9 ワカキ人くタ、フタリハシムカヒハシキサセ給ナ(巻下二丁ウ)

〔仮定条件の句〕

10 誠アリテ行ハシシテキタラハ、ユカマヌ事ニテアラムスル也(巻上六丁オ)

11 随求タラニハシ読ミテオハシマサハ我カ門流ニテコソヲハシマサムスレ(巻下四丁オ)

○〔否定の句〕 12 随分ニ阿界ワレモくトヨミアヒテオハシマセトモ一人トシテ其印言ハシオホエタル人モナシ(巻上七丁ウ)

○〔特定の制約のない用法〕

13 二三時ノヲコナヒハシヲムネットシテ、サテソノヒマくニシツヘクハ学問スヘキ也(巻上五丁ウ)

先の小稿では、否定の句にある例として、妙本寺本曾我物語から例示したが、本稿のは更に溯るものである。第二の注意点は、「バシ」と他の助詞との重なり方であつて、13「バシヲ」、6「バシヲモ」、とヲ格助詞の上に在る用法の存することである。山田孝雄博士は、延慶本平家物語のバシについて、「バシ」の成立が「ヲバシ」の義を基とするが故に自ら主格に附属することなく、ヲ格補語に附属するもの最も多し、それなほその本性の存留するが故なるべし。ヲ格補語に附属せるものの例、この時には「ヲ」助詞のあらはれざるを注目せよ」と説かれ、「ニバシ」「バシニ」「バシン」「バシモ」「バシヤ」の例を指摘されている。右の資料でもヲ格が最も多いが、外に(9)のような例もあり、連用形に附いている。特に(6)(9)のヲ助詞と重なつた例が確かに存することは、「ヲバシ」を原義することに再考の要が生ずる。この資料のが、延慶本平家物語よりも溯り、発生期に近いだけに重要である。右の例は、(1)「バシモ」を含めて、格

助詞・係助詞に上位した例のみであり、しかも5「バシセデ」、(7)「バシセジ」、10「バシシテ」のようにサ変動詞に続いており、「バシ」が、形式体言的な語としての用法を示している。

(2) 推量表現の「ムズ」

全例「ムズ」のみで、「ムトス」は用いられていない。

〔終止形〕 1 湯アヒテコソアラムスラメ是常仰也(巻上三丁オ)

2 コクケンニノソミテハカナハスヤ候はんすらん(巻上十七丁ウ)

〔連体形〕 3 学問モナニモソノ時はシサ、ムスル事也(巻上十八丁オ)

4 学問タニモセハヤウくシラレムスル也(巻上三丁オ)

〔已然形〕 5 ナニ事モミナシサシテコソマカラムスレ(巻上十丁ウ)

6 我カ門流ニテコソヲハシマサムスレ(巻下四丁オ)

「ムズ」は平安時代の和文で話言葉として現れ、鎌倉時代でも同様であつて、延慶本平家物語を見ると総て話言葉か又はそれに準ずる場合だけである。今昔物語集については吉田金彦氏の詳細な調査がある(『今昔物語集における推量語「むず」「むとす」の用法』訓点語と訓点資料十九輯)。本文献の「ムズ」も、これらを補強するものであり、同時に、本資料が口頭語の性格を持つことを物語っている。

(3) 「マキラス」の補助動詞的用法

謙讓の意の「マキラス」は、平安時代には「参上させる」「さしあげる」などの動詞として用いられたが、この文献には、動詞・助動詞に付いて補助動詞として用いた例が見えている。

依之順行房初行ハ畢テノチニコレヲトリカハサレマイラセシ事(巻上八丁ウ)

(如)
此ハ阿部ノ大日女来ニウケマイラスルト思ハセ給ヘキ也(卷上十二丁オ)

この語は、中世語として、「まらする」「まいす」とも転じ、後「ます」となったが、その補助動詞としての古い姿を知る例である。

(4) 接続助詞「カラハ」

和哥ハヨクヨマムナントスルカラハ無下ニマサナキ也(卷上十二丁ウ)

この「カラハ」は、連体形に付いて、「故に」の意で用いられており、現代語の接続助詞「カラ」の用法に通ずる。吉川泰雄氏は、「古代の孤例であるから吟味を要するかも知れない」として、既にこの例に言及され、「する以上は」という意味を表す慣用語と説かれた(『接続助詞』から)と慣用語『からは』(国語研究第三号)。「からは」は上代からあるが、「故に」の「から」は、従来は抄物・キリシタン資料など室町時代後期に始めて文献に姿が現れるとされたものである。出雲朝子氏は、更に、毎月抄(新校群書類従)二例、愚秘抄(同叢書、歌学大系本)、愚見抄(歌学大系本)などの例を指摘されている(『中世の接続助詞』から)についての一問題「毎月抄の文章と徒然草十二段の解釈にふれて」未定稿六号)。所拠本が新写本である所に不安が残ったが、却廢忘記の用例は、その傍証となるものである。同氏は、「有明の別」に右と同語形の「物心ほそきからは」のあることを指摘された。石垣謙二氏が「助詞の歴史的研究」で、「俗語の世界に躊躇してゐた(助詞)から」の通時的考察とされた近代語の「から」の中世における、一状態を、談話語たるこの文献に見ることは重要である。

(5) 接続助詞「ナガラ」

寺中ニキナカラ寺ヲ護持スル心ノナキハ大ナル過カニテ候也(卷上十九丁オ)

連用形に付き、下句に対して逆接の接続関係を示す助詞としての用法を示している。接続助詞の「ながら」も、「つつ」に対して近代語的性格を持つている。平安時代には上の動詞が心理状态的な語であるのに対して、中世以後は動作語にも付く(此島正年「国語助詞の研究」)とされる点から、左の例を見るに、動作語に付いた用法であつて、中世語としての姿を示していることが分る。

(6) 「アレテイ」「コレテイ」

スヘテアレテイノ事ハタレノモミアハセ給ハンニシタカヒテ
サウチヲモセサセナラサセ給ヘキニテアル也(卷上十八丁ウ)

コレテイノ事ハカク申ソメツレハヤカテ和哥ノコトハナトニモナルコソ候メレ(卷下十二丁オ)(例文二を参照)

延慶本平家物語にも、「是躰ノ事ヲ」「アレ躰ノ人ノ習」があり、山田孝雄博士は「躰といふ語は代名詞『コレ』『アレ』を受けて之と相合して一の副詞をなすに至れり」(二四四一頁)とされた。又土井忠生博士は、「事物代名詞」の項において、「日蓮の法門可被申様之事の中には『それ』の語が見えてゐる。『それ』を名詞に直接する言ひ方は鎌倉時代の終頃からあつたのである」(近古の国語四八頁)と説かれた。却廢忘記の例は、確例として、鎌倉初期にまで溯つて用いられていたことを示している。

(7) 「コレラホド」

伝受ハミナ先本ヲ書写シテノ左右ナリコレラホト真言教法輕メタル所ハスヘテアルヘカラス(卷上七丁オ)

「平家物語の語法」(一四四〇頁)に、「ホド」これはもと名詞なるが、上に名詞等を受けて、相合して一の副詞と見らるべき姿を呈せり」として、「アレホト」「コレホト」などの外、「イクラホトカ難堪」を挙げている。

(8) 代名詞「御辺」

或時被仰正達房阿闍梨云

御辺ハ先師闍梨タチノオハシマシシ、定ヲ思ハエ其定アラハヤト
思食ス、我ハ又惠果弘法等御行儀ヲマナフ (卷上二十二丁ウ)

「我ハ」に対して、対称の人名詞として用いられている。

(9) 「カセく」「カラく」等

アマリニ学問タケクナリスレハマツ文ノチカヒメサウハクニ
ミ心ノハセテヤカテンナタヘツラレテカセくトノミナリモテ
イキ (卷上五丁ウ)

タ、一向ニカラくトヲコナヒテオハシマシアフヘシ (卷上十
四丁ウ)

延慶本平家物語に、擬態語・擬声語の多いことは山田孝雄博士の指
摘された所である。抄物の言語にもこの種の語の屢々見られること
は周知の所である。右はこれらと併せて口頭語の一面を示すもので
あろう。

尚「フット」(「決しての意」)の、

コソチャウナラハコレヨリノチノ師将フツトアルマシキ事也
(卷上九丁ウ)

又關伽水ナトハ我ハ昔シフツト人ニハトラセスイカニモ自作ト
リキ (卷下一丁ウ)

の語や、「ミルく」の疊語もある。

ハルノスエ夏ノハシメニハシキミノ花ノミルくトシテ心ヨケ
ナルカ (卷下一丁ウ)

(10) 口語的語詞—動詞・形容詞・副詞—

〔サバクル〕 或時禪堂ニテ御学問アリトウロヲ持参シテコレヲ

サハクル仰云

アフラサハクリシテハ紙カナンソニテカナラス手ヲノコヒテ文
ヲサハクルヘキ也イカニモ油ノツク也 (卷上二丁ウ)

タ、意地ハカリヲシツメサハクリタルカハリメ也 (卷上十三丁
オ)

「取扱ウ」の意であり、色葉字類抄前田家本の「持サハク」と同源の
語であろう。沙石集・源平盛衰記などにも見えるが、右は鎌倉初期
の確例であり、口頭語の匂がある。

〔モタイナキ〕

文サウニカク事モタイナキ事也 (卷上十五丁ウ)

又大門ノワキノ河屋ノシトケナキモタイナキコト也。辯ノヒシ
トチリタルミクルシキ事也、自然ニ人モ参シテ其寺ハコ、チカ
、ヘリテナトイヒテハモタイナキ事也 (卷上十八丁ウ)

「ぶざま」などの意であり、口頭語らしい。

〔タイテイ〕

初夜ノ時ハヨヒニイリテ後夜以後タイ躰アカ月出堂シヌレハ
(卷上二十一丁ウ)

色葉字類抄前田家本に「大体タイテイ大底タイテイ」とある。

〔イカサマニモ〕

頭ヲモキラレテシニナムトセント思キテ候ヘハイカサマニモ学
問モノニモソノ時ハシサ、ムスル事也 (卷上十八丁ウ)

一語として副詞のように用いられている。

以上の(一)―(四)に挙げた諸事象は、口頭語の性格を見取らせるもの
である。その中には、近代語として新たに生じ、現代語に伝えられ、
意味や用法まで通ずる語も既に幾つも見られる。そして、これらを
従来の研究成果に比べると、更に確かな且つ古い使用例を示す、
「バシ」「シニナム」「アレテイ・コレテイ」「カラハ」や、補強する
例「連体形の終止機能兼用」「アリ也」「ムズ」、又「マキラス」「ナ
ガラ」「コレラホド」、「モタイナキ」「イカサマニモ」などとなる。

却廢忘記は、小冊子で言語量も少い文献であるが、そこにこれほど多種多様な近代語の使用例が指摘されたのは、その聞書としての談話語の性格に基く所によると考えられるのである。

但し、一方、格助詞「ニテ」は総てこの形で現れ「デ」の例がないことや、用言の撥音便・促音便は全くなくその原形で現れるなど、尚考究すべき問題も存するのである。

(四) 表記について

本文献は片仮名交り文であり、僧侶の手に成る所から、院政・鎌倉期の打聞集・法華百座聞書抄などと表記上共通する点も多い。

(一) 送仮名

体言・副詞の送仮名を、音節数に拘らず最終音節の一つの仮名を以て示す傾向はこの資料でも指摘することが出来る。

昔シハ(巻下一丁オ) 過カニテ(巻上十九丁オ) 下モニ(巻下一丁オ) 死ニ期(巻下一丁ウ)

(二) 抄物書

抄物書として次の諸語がある。他の片仮名交り文のそれと共通するものが多い。

女来(如来)(巻上三丁ウ、二十二丁ウ) 井(菩薩)(巻上十七丁オ、十八丁ウ) 苾(菩提)(巻上十八丁オ) 苾心(巻上十二丁オ、巻下四丁オ) 冊(涅槃)(巻下二丁ウ) 广羅(魔羅)(巻下三丁ウ) 炎广王官(巻上十丁ウ、巻下四丁オ) 達广宗(巻上十六丁ウ) 和哥(巻上十二丁オ、巻下二丁オ)

(三) [m]と[n]との表記

漢語の鼻音、及び和語の撥音には「ム」と「レ」とがあり、「ム」は[m]に、「レ」は[n]を表するのに用いている。

○漢語

[n] ホンイ(本意)(巻上一丁ウ) ソンシ(損)(巻上五丁オ、五

丁オ、九丁ウ) ナンケ(難解)(巻上十四丁オ) コクケン(刻限)(巻上十七丁ウ) センナキ(詮)(巻上十九丁ウ)

[m] コラムセヨ(御覽)(巻上十七丁ウ)

○和語

[n] ナント(助詞)(巻上十二丁オ、十二丁ウ、十六丁ウ) ナン

ソ(巻上二丁ウ)

[m] 女(巻下一丁ウ)

助動詞「ム」(巻上三丁ウなど十五例)

「ラム」相構マラム(巻上四丁オ)(巻上十五丁ウ)

「ムズ」十例

△助動詞「ム」を「ン」と表記した例

学問センホトハ(巻上二丁オ) など五例

ヨマセンスル也(巻上二丁オ)(十八丁オ) 二例

候はんスル(巻上十五丁オ) など「ん」の例三例

[m]と[n]との表記上の区別は存する原則が窺われるが、助動詞「ム」だけに違例があるのは注意される。先の小稿で、院政末期鎌倉初期には区別を原則としながらも違例の見えることを述べたが、却廢忘記もその様相を示す一証である。

補訂(日本語の歴史・中世)

「日本語の歴史・中世」(昭和四十四年十二月号)の小稿に関する補訂をする。これらは脱稿後の調査などで知り得たものや、福島邦道氏・柳田征司氏・佐々木峻氏・沼本克明氏の教示によつたものである。

○58頁上段 厚強、用の「厚」について

「厚」の例として、元龜二年京大本運歩色葉集に「敦厚(一26)」「厚恩(二51)」「厚朴(三60)」がある。これについて、安田章氏は

その複製本解題で、「刷」^{ハキリ}「御簪」^{ミカヅ}などと共に「合音の形を期待する所に、開音の表記が見られる例」とされた。沼本克明氏によれば、世尊寺本字鏡に「厚カウ六胡口反、古於反」と「カウ・ユウ」両形があり、他に「カウ」形は、古く慈光寺藏大般若経に「厚」二例（松尾拾氏国語学三輯の紹介による）、法華経单字、教行信証（恩厚）、聖衆来迎寺藏妙法蓮華経にも存することを示され、呉音系資料に見えることを教示された。これは、日本漢字音そのものの問題として考究すべき事象である。尚、古文孝経三元亨元年点(三三)には同じ侯韻の漢字に「侯」「郊」「后」とある例も示された。これは、他の資料は「コウ」であることと、時代とから考えて、開合の乱れを反映すると考えることの可能であるものであろう。

○59頁上段 合拗音の消失の始まり

金沢文庫本春秋経伝集解文永点には、「軌クキ・キ」「癸クキ・キ」「貴キ」「蠶クキ(4・キ)や「拱クキヨウ・クヨウ」「蠶クキヨウ・キヨウ」のように、同一漢字について、「クキ」とその開音の「キ」との両表記が見え、又齊韻匣母の字は、「慧クキ」「惠クキ」の二例の外、「摺ケイ」「摺ケイ」「蹊ケイ」がある（小野ツネ子氏調査）。「キヨウ」「クヨウ」の例は、「拱キヨウ」「恭キヨウ」(興福寺藏大慈恩寺三藏法師伝古点)、「兢キヨウ」(古文孝経建久六年点)など院政鎌倉時代に見られる。

○61頁下段 連濁の実態

「執」政(文集嘉禎四年点)の、入声音の後の連濁は、仮名「シツ」によると、唇内入声韻尾が促音化した可能性があり、それが[t]と[n]との通用(60頁上段)により、鼻音[n]との相関に基いて連濁したのもかも知れない。尚、連濁例の中、「蟬」「鬢」「浅深」「命終」は、「鬢」「深」「終」が韻鏡清音字であるが、観智院本類聚名義抄・法華経单字・法華経音には濁音例があり、日本漢字音としては本濁の可能性があるので除く。

○62頁下段 イ段音の一音節語の長音化

最近、岡本勲氏は、日本字音のこの事象を、中国字音との関係で説かれた(日本漢字音に於ける止撰の所謂長音表記に就て)韻鏡の開合・開・合の分類基準との開聯に於て「国語国文三八ノ八、昭和四十四年八月)」。しかし、日本でも、和語に65頁の「杼」以下の諸例のように、一音節語の長音化の例があることは確かで、これとの関連も考えなければならぬ。

○64頁下段 牛体について

福島邦道氏の教示によれば、「かたこと」巻四獸部に「こつていうじ」が載せられてあり、又山田忠雄氏は弘治二年本節用集の「特牛定」^{特牛}「牯牯同」の用字に注意され、運歩色葉集の同種の例をも指摘されていたことを思わしめる(「本邦辞書史論叢」所収)。「節用集と色葉字類抄」七一(四頁)とされた。元龜二年本運歩色葉集には「特牛」の下に「牯牯定」とあり、静嘉堂文庫本には「コツトイ」のルビが白帝社版では見えない。この音訛形の古例が遙かに溯つて、院政末期に存したことになる。これは個別的な問題とも考えられ、江戸語の「一昨日」の類との関連は尚考究の余地がある。

○64頁下段 「キヤメテ(極)」の類について

室町時代の例として、史記抄の問書に「キヤメテタノシウテ」(京大本)が見られる(来田隆氏調査)のは、問書という性格と見合せて興味が深い。尚、「語り合う」の類の古例として、高山寺藏御明導師作法(折紙二紙一通、九七函ノ番外十三号)鎌倉後期写本に、

○大施主殿下。排^シ備^シ。数^シ万^シ。燈^シ明^シ。

と「ミヤカシ」の例が、昨年末の調査で見付かった。「合う」以外の例であり、しかも鎌倉時代に溯つた例として貴重である。

○67頁下段 難^シ謝^シ陪^シ(高山寺藏古往來)

この例は、「ハンヘリ」が、形容詞の終止形に付いた例で、接続法の乱れたものとして挙げた。しかし、即字的な加点に基づくというような別の事情も考慮する余地もある（佐々木峻氏説）。

○73頁下段「見セシム」の類

興福寺藏因明教授抄承元元年点にも、

服^シ 服^セ 服^シ 服^セ

の類例がある。

○75頁上段「ヘムヒノアツマ入」

春日政治博士は、この訓が六臣注文選応永点にあり、興福寺本三藏法師伝永久点に「鄙治因」に「アツマツノ」の訓のあることを指摘された（西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究、研究篇九〇頁）。築島裕博士も言及された。

○73頁下段「サシム」について

抄物の「サシム」は、活用形式及び意味（敬語）が異なるので、「射」の使役における語とは一応別とすべきであろう。抄物の「サシム」については、湯沢幸吉郎博士「足利期の敬語助動詞シモ・シムに就いて」（国語と国文学昭和四年九月）に説かれ、又、大塚光信氏「抄物とその助動詞三つ」（国語国文学昭和四十一年五月）でも、この語源説を確認されている。柳田征司氏は、この抄物の語の、鎌倉時代に溯るらしい早い例を示された。

台トストハ仏ノ御座トサシマウト云タル心也

仏ノ御説法有ラウトテ閻浮提ニ集会サシマウタル事也（高山寺

藏題未詳聞書、補二ノ六二六号）

○77頁下段 湯桶読

湯桶読の古例の一と考えられるものに、将門記承德三年点本の「移牒」がある。

雖^レ送^ニ度々移牒^ス（二八二行）

正誤表（日本語の歴史・中世）

〈頁・段・行〉

〈正〉

〈誤〉

48上2 数十年間

数十年

〃〃22 用いられていたものであった

用いられたものであった

49上6 (字母「州」という) ↓

(字母「州」という) ↓

〃〃8 (2)音韻では

(3)音韻では

〃〃11 [eu]と[jou]

[eu]と[ou]

〃〃13 地方文献資料

地方資料文献

50上18 (文永十年〔三七三〕写)

(文永十年〔三七三〕)

〃〃26 仏教説話文学

仏教・説話文学

〃下23 | 25 「鎌倉時代中後期」の図版の二例の中、下の例は、

〔鎌倉時代後期以降〕の図版と入れ換える。

51上3 カ、兀

カ、兀

〃下第二表 ネー(二字)

カ、兀

52上25 法華経寺藏三教指帰注

法華経寺藏・三教指帰注

〃下23 諸口 併テ

諸ニ 併テ

53上12 極楽願往生歌・梁塵秘抄

極楽願往生歌梁・塵秘抄

55上5 (東大國語研究室藏)

東大國語研究室藏

〃〃14 国文学攷

国文学攷

〃〃17 尚 尚範

尚 尚範

56上15 返点

返す点

57下10 [eu]と[jou]との混同

[eu]と[ou]との混同

〃〃24 大学院紀要二

大学院紀要二

58下1 狎ノ狽

狎ノ狽

